ものな思ほし

我が大君　ものな思ほし　皇神の
継ぎて賜へる　我がなけなくに
（巻一―七七）

「わが大君よ、何もご心配はいりません。皇祖の神が大君についてお与えになった私がおりますものを」という意味で、御名部皇女が詠んだ歌である。題詞によると、和銅元年（七〇八）に元明天皇が「ますらをの　ものの大臣　楯立つらしも」（勇士たちの鞆を弦がはじく音が聞こえて来る。物部の大臣が今しも楯を立てているらしいよ）と詠み、それに唱和して詠まれたとある。

問題は「ものな思ほし」のその中身。天皇は、一体何を心配していたのか。

和銅元年は元明天皇が即位した翌年で、藤原宮で新天皇としての最初の新嘗祭つまり大嘗祭を行なうときだ。その儀式の護衛として参加すべく、物部大臣つまり左大臣・石上麻呂に指示された兵士が右往左往し、宮のうちがざわざわしている。そうした風景は、たしかに目の前にあった。だがこの歌に漂う不安感は、もっと胸の内から噴き出してくるもののようだ。

じつは元明女帝の即位にさいして、つよい反対を受けていた。元明女帝は天武天皇・持統天皇の嫡子である草壁皇子の正妻だったが、しょせん皇太子妃である。大王の正妻（大后）が即位したことは推古天皇・皇極天皇などの前例もあるが、皇太子妃が即位した例などない。草壁皇子は皇太子のままで死没して大王家の家督を相続していないのだから、嫡子はその兄弟に譲るべきである。それをむりして草壁皇子の子・珂瑠皇子を立てて文武天皇とした。その文武天皇すらも死没したのだから、もとに戻って天武天皇の皇子または皇孫から嫡子を選びなおせばよい。女帝などむりに立てる必要がない。そういう反対を、藤原不比等などが権力づくで抑え、ようやく元明女帝の即位を迎えた。これでまだ幼い文武天皇の子・首皇子（のちの聖武天皇）への皇位継承は約束された。しかし批判・不満はいまもくすぶっている。

そうした裏面史を知るものにとって、この歌は元明女帝の心のうちを映し出していて貴重である。もっとも深読みにすぎるかもしれないのだが。

耳成山の南にある藤原京大極殿址

（万葉古代学研究所副所長・松尾　光）